

Fさんのこと ②



後見人 司法書士 古川 直子

初めて病院でお会いしたその日、医師から看取りですと告げられた末期心不全で要介護度5のご本人が、帰宅されたその後どうなったかについて、前回の続きです。

病院でお会いしたときの印象や医師の説明から、ご本人の余命は2～3週間あまりであろうと私には見えました。自宅に帰りたいと仰ったご本人のために、きょうと福祉倶楽部さんにはターミナルケアのためのプランを組んでいただき、万全の体制での在宅支援が開始しました。夜間だけはどうしても自宅にひとりきりになってしまいますが、実はこれは病院や施設での実際とほとんど違いはありません。そして日中は3～4回ヘルパーが訪問し、毎度1時間あまりをご本人のためだけに費やしてくれます。施設や病院での介護より、居宅介護のほうがむしろ手厚い場合もある、これは私にとっても意外な発見でした。

驚いたことに、やがてご本人はどんどん活力を取り戻してゆきました。末期心不全であることに変わりはありませんが、真っ青だった顔に血色が戻り、話しかけにもよく反応されるようになりました。食事もよく召し上がり、次第に体力も回復してきました。またご本人にとっては、かつて自宅でいっしょに暮らしたご家族が、頻回に訪問して下さったことも大きな安心に繋がっていたに違いありません。

ご本人はそのうち週2回のデイサービスの利用を再開するまでになりました。これほどまでに回復されるとは私には予想だにできませんでしたが、担当ケアマネジャーの有田氏は「これは奇跡なんかじゃない、当然なんだ」と話しています。病院は病気を治すところではあるけれど、人を生かすところではない。施設では食事や介護の不安はないかもしれないけれど、自分が主役の生活の舞台ではない。人間の生きる場所、人生のステージは病院でも施設でもなく、「家」なのです。病院や施設を転々とするうちすっかり弱ってしまったご本人は、自宅に戻ってご自分の人生を取り戻したのです。

驚異の回復をした結果、寝たきりだったはずのご本人が自宅内を這って移動し、ベッドに戻れなくなっているところをヘルパーが発見することもしばしばありました。後になってわかったことですが、夜間や早朝に外に出てしまい、ご近所の方が発見し連れ戻して下さったことも幾度かあったようです。重度の認知症のため、ある時期から自分がいる場所がわからなくなってきていたようですが、住み慣れた家の感覚は失われることなく、ご本人に安心感を与え続けていたようです。

穏やかに在宅生活を送る中で、ご本人はやがて誤嚥性肺炎を起こして数度の入退院を繰り返され、最後はご自宅で自然に息を引き取られました。

私がこれまで成年後見人をしてきた中には、病院や施設に生活の場を見出した方もいらっしゃると思います。しかしそのみなさんは現役時代に医療に従事しており、自宅よりも病院に安心感を覚えるという方や、ご家族を亡くされた孤独感が施設に入居することによって癒やされたという方もありましたが、それよりも自分の人生を主体的に選択することをずっと昔に諦めてしまっている方が多かったように思います。

介護度が重くなったら自宅で暮らすのはとても無理だから、施設や病院に入る、入ってもらわなければならないと考えている方は少なくないだろうと思います。しかし最初から無理だと決めつけてしまっていることはないでしょうか。そういうものだと思ってしまうことはないでしょうか。自分の人生は自分で決めるということ、自分のこととしてだけでなく、支援する側も改めて考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイツ東台101号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

E-mail info@fukushi-club.com

きょうと福祉倶楽部ホームページ

Peace

